

研 究

乳幼児期の食事場面における母子相互作用の
縦断研究

—母子の情動表出と葛藤的やりとり—

中野 淳也¹⁾, 長谷川智子²⁾

〔論文要旨〕

本研究では、食事場面における乳幼児期の母子相互作用の変化を検討することを目的とした。2組の母子の離乳食開始から24か月齢までを縦断的に観察し、情動表出についての量的分析と葛藤的やりとりの質的分析を実施した。その結果、量的分析からは母子のポジティブ情動のみ同期性が認められた。量・質の分析結果から、Ⅰ期：母親の主導性と子どもの受動性、Ⅱ期：子どもの自己主張の明確化と母親の試行錯誤的な対処行動、Ⅲ期：子どもの情動表出および親の行動に対する反応の多様化と母親の適応的反応の3期に区分された。小児保健現場で母親が子どもの食の悩みを訴える場合は、専門家は、その時期の発達を把握したうえで、子どもの食事場面における行動の個別の意味を伝える必要性が示唆された。

Key words : 縦断研究, 母子相互作用, 葛藤, 情動表出, 食事場面

I. 問題と目的

乳幼児期における食の社会的相互作用に注目した研究¹⁻⁷⁾では、食を単なる栄養摂取として捉えるのではなく、養育者と子どもの相互作用の重要な場面であることを指摘している。食事場面では、必要なものを必要なだけ適切な仕方で食べさせたいという養育者の意図と、好きなものを好きなだけ自分の思った通りに食べたいという子どもの能動性が存在するため、子どもと養育者の間に対立や葛藤が生じやすい⁷⁾。一方で、食事場面はそのような葛藤だけではなく、楽しみの中としての機能ももっている⁵⁾。

本研究では、乳幼児期の食事場面の母子相互作用がどのように推移するか、離乳食開始時期から2歳までを縦断的に研究する。本研究では母子相互作用を、互いに影響を及ぼし合う統合された1つのシステムとみなす⁸⁾。また、縦断研究としたのは、発達を平均的に

捉えるのではなく、個々の変容過程を検討するため⁹⁾である。本研究の特色は食事場面での母子の情動表出の推移を検討すること、分析手法として量と質の両面を扱うことの2点である。

母子の情動表出を扱う理由は次の通りである。先行研究では、食事場面の対立・葛藤的な側面⁷⁾あるいは楽しさの側面⁵⁾が示されている。そうした食事場面での特徴は母子の情動表出においても影響を与えることが考えられ、ポジティブ・ネガティブ情動の両面から検討する。分析において量と質の両方からアプローチする視点は次の通りである。まず量的な分析により、母子の情動表出の推移において連動性や同期性が認められるか、子どもの行動の推移において発達の特徴が見い出せるか検討する。さらに、特に母子の葛藤的やりとり⁸⁾に着目して出現時の状況や文脈を踏まえた質的分析を実施する。母子の葛藤的やりとりでは子どもにネガティブ情動が生じ、母親はその情動を抑制する

A Longitudinal Study of Mother-infant Interactions during Mealtime :
Emotional Expressions of and Conflict between Mothers and Infants
Junya NAKANO, Tomoko HASEGAWA

[2833]

受付 16. 4.20

採用 16.12.28

1) 大正大学大学院人間学研究科 (大学院生)
2) 大正大学心理社会学部 (研究職)

ために情動調整¹⁰⁾をする。本研究では、1回、個性的現象がもつ意味を重視し、多様な要因の同時的把握、要因間の関係性の力動的把握をするために¹¹⁾、具体的な葛藤場面を質的に分析していくこととする。

本研究の目的は次の2点である。第1は、食事場面における母子相互作用のポジティブ・ネガティブの情動表出、および子どもの能動的行動（自己主張性も含む）の月齢による推移について量的分析を用いて検討することである。離乳食開始時期から2歳までの子どもの情動発達では、8か月齢頃までに喜び、悲しみなどの原始情動が現れ、その後、18か月齢以降に照れや共感などの自己意識的情動が出現する¹²⁾。また同時期の認知発達では、12か月齢頃から二項関係から三項関係¹³⁾への移行や自己主張的行動の活発化¹⁴⁾が生じる。これらの発達に関わる行動は食事場面においてもみられるものと考えている。第2は、母子の葛藤的やりとりについて、各児異なる月齢において3つの葛藤場面を記述的に取り上げ、母子相互作用の発達の変化を質的に論じる。

II. 方法

1. 分析対象者

誕生時から就学前までの食行動と母子関係の縦断観察研究7組の母子の研究協力者のうち、対象児が第1子であり、第2子誕生が同じ時期という条件から2児(A, B)を抽出し、2組の母子を分析対象とした。A(男児)、B(女児)いずれも満期産で出生し、出生時の異常はなかった。母親の出産時年齢についてはAの母親は25歳、Bの母親は26歳であり、母親の第2子出産は、Aが17か月齢、Bが18か月齢時点であった。いずれも定型発達であり、離乳食の食事内容は月齢相応であった。Aは19か月齢、Bは15か月齢の時に転居した。

2. 観察状況と手続き

1か月に1回各家庭に訪問し、子どもの食事場面と母子遊びの場面について観察した。観察者は自ら協力者に働きかけず、協力者による働きかけがあった時のみ最低限の関わりをした。観察者がデジタルビデオカメラで母子の行動を手持ちで撮影、記録した。A, Bいずれも転居前の食卓は座卓であり、子どもは動き回ることが可能であったが、転居後はダイニングテーブルとなり、大人の介助がなければ椅子から降りることができなかった。

3. 分析対象期間と1回の食事時間

分析対象期間は、対象児の離乳食開始時から24か月までであった。離乳食開始時はA, Bともに5か月齢であった。分析対象となった観察回数はAが20回、Bが17回であった。Bの観察における3回の欠損は、母親の第2子の懐妊による体調不良(8, 9か月齢)、Bの体調不良(24か月齢)での観察中止によるものであった。

分析対象となる1回の食事時間の開始は「いただきます」の合図または食卓に食器を並べ終わった時点とし、終了は「ごちそうさま」の合図または食器を食卓から下げ終わった時点とした。1回の食事時間の平均値は、Aが17分53秒($SD = 5$ 分43秒)、Bが19分47秒($SD = 7$ 分54秒)であった。

4. 分析の方法

1) マイクロ分析

量的分析として、母子の行動についてコーディングシステム ver.3.32 (Behavior Coding System: BECO) (株式会社ディケイエイチ製)を用いてマイクロ分析を実施した。コーディングされた母子の行動の変数は42変数(子ども28変数、母親14変数)であったが、本論文で使用された変数は20変数(子ども15変数、母親5変数)であった。各変数の具体的な行動は、一部先行研究を参照し^{4, 6, 15)}、それ以外の変数は発達の一般的特徴と、筆者らが実際に分析する過程で、乳幼児発達の専門家間で十分な共通認識が得られていると判断した行動を変数とした(表1)。各変数について、その行動の生起から終了までの時間を10ミリ秒ごとにコード化した。コード化された変数は、BECOにより頻度、1回あたりの時間、出現率[(対象となる行動が出現する時間の総和/対象となる食事時間)×100%]の3種類が算出された。本研究では、出現後すぐ消失する行動に対して頻度、出現後一定時間持続する行動に対して出現率を使用した(表1)。母子の情動表出の連動性については、1回の食事において出現した母子の情動の出現率の推移に着目した。また、母子の行動の同期性については、ターゲット行動生起の3秒以内に生起した行動を抽出し¹⁶⁾、頻度を用いた。

評定者間信頼性を検討するため、A, Bの観察データからランダムに抽出した1月齢分(抽出の結果A児20か月となった)について、行動コーディングの経験があり乳幼児の保育を専門とする学卒生1名が分析した。その結果、20変数における κ 係数の平均は

表1 分析に用いた変数の分類一覧

上位カテゴリ ^{注1)}	下位カテゴリ	具体的な行動	指標
子ども：食事行為		食べ物を口に入れてから咀嚼・嚥下を含む一連の行動	出現率
子ども：受動的摂食		子どもが母親の介助により摂食する	頻度
子ども：自食	手による摂食	子どもが自分の手を使って摂食する	頻度
	食具による摂食	子どもが自分で食具を用いて摂食する	頻度
子ども：能動的行動	うなずき	首を縦に振る（肯定的）	頻度
	首振り	首を横に振る（否定的）	頻度
	手伸ばし	対象に対し腕を伸ばし、手のひらを向けている	頻度
	指さし	対象に対し人差し指を向ける	頻度
子ども：ポジティブ情動	笑顔	口角が側上方へ移動している状態	出現率
	笑い声	笑顔に伴う特徴的な発声	出現率
	ポジティブな表情	笑顔ではないが、喜びや満足に該当する表情	出現率
	ポジティブな発声	明るく楽しそうな声	出現率
子ども：ネガティブ情動	泣き	眉をひそめるなどの不快な表情と断続的な発声がみられる状態	出現率
	ネガティブな表情	唇を尖らせる、不快によって眉をひそめるなどの行動	出現率
	ネガティブな発声	発声や発話に明確な不快情動の表出が伴っている声のトーン	出現率
母親：ポジティブ情動	笑顔	口角が側上方へ移動している状態	出現率
	笑い声	笑顔に伴う特徴的な発声	出現率
	ポジティブな表情	笑顔ではないが、喜びや満足に該当する表情	出現率
母親：ネガティブ情動	ネガティブな表情	唇を尖らせる、不快によって眉をひそめるなどの行動	出現率
	ネガティブな発声	発声や発話に明確な不快情動の表出が伴っている声のトーン	出現率

注1) 下位カテゴリのあるものについては、すべての下位カテゴリの指標（頻度、出現率）の総和を、上位カテゴリの指標（頻度、出現率）とした。

表2 A, Bの主要な葛藤的やりとりが生じた原因となる行動がみられた月齢

対象児	原因	月齢																			
		5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
A	食事終了時の「ぐずり」	—	—	—	○	○	○	○	○	○	○	○	—	○	—	—	—	—	—	—	—
	「食べない」、 「食べたくない」	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	○	○	—	○	○	○
B	立ち歩き	—	—	—	—	—	○	○	○	○	○	○	○	—	—	—	—	—	—	—	—
	物を落とす	—	—	—	—	—	○	—	○	—	○	○	○	—	○	—	○	○	○	—	—

○：あり， —：なし

0.78であり、ほぼ満足できる一致率であると判断された¹⁷⁾。

2) 母子の葛藤的やりとりにおける質的分析

母子の葛藤的やりとりを、子どもが月齢を超えて繰り返す行動であり、かつ食事の進行を妨げたり、食事マナー上、母親にとって問題行動と位置づけられるような行動のやりとりがどのような文脈で生起し、母親がどのように対応するか、具体的に記述することによって分析する。また、本研究において母親にとって実際に問題となった子どもの行動を表2に示した。本研究の観察期間を情動¹²⁾、認知^{13,14)}の発達の一般的特

徴から5～12か月、13～17か月、18～24か月に区分し、各時期の代表的な葛藤的やりとりを取り上げた。

5. 倫理的配慮

出生時から小学校入学までの食と母子関係についての縦断観察研究として協力者を募集した際に、協力希望者に直接面会し次のようなことを説明した。すなわち、本研究の主旨と観察、観察データは研究以外で用いられないこと、プライバシーの保護遵守、研究協力による不利益は生じないこと、研究協力は自由意思に基づくものであり不都合等が生じたらいつでも協力を

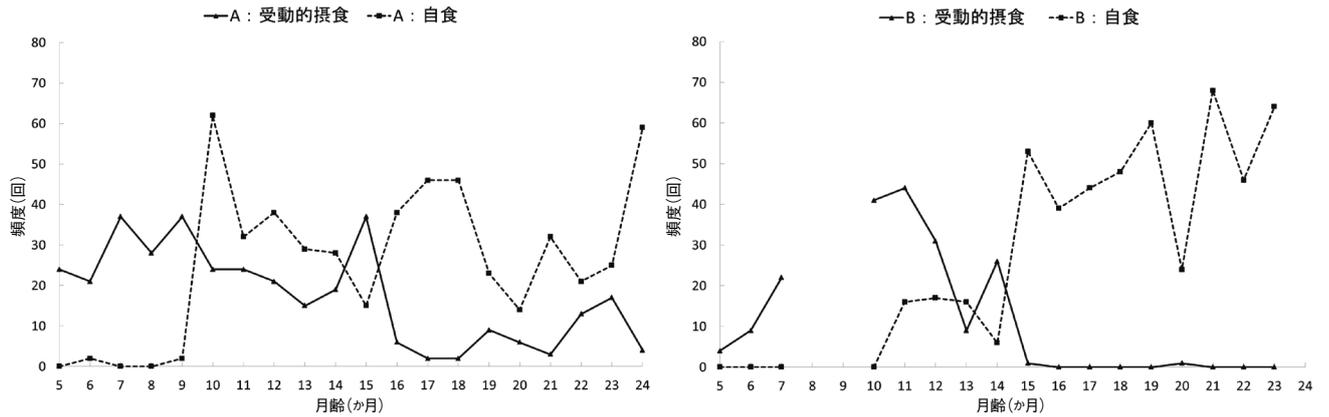


図1 受動的摂食と自食の頻度の推移 (左 A, 右 B)

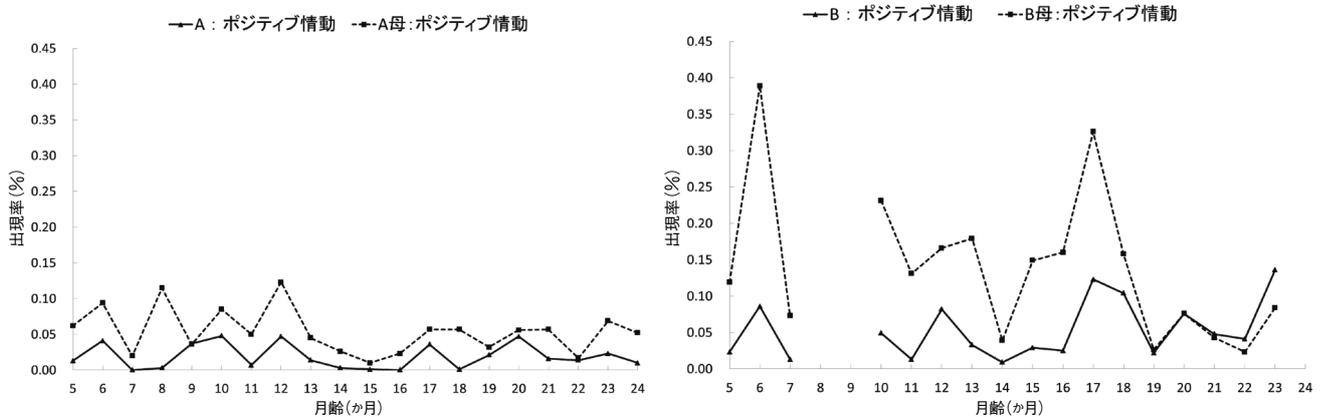


図2 母子のポジティブ情動の出現率の推移 (左 A, 右 B)

終わられること等であった。それらについて同意が得られた後に、協力希望者には同意書に署名してもらった。

III. 結 果

1. 母子の行動のマイクロ分析

1) 食事行為の出現率の推移

食事行為の出現率の推移の範囲は、A は29.9～75.9%、B は27.1～75.9%であった。

自食がみられるようになったのは、A は10か月齢、B は11か月齢であり、自食が受動的摂食を最初に上回ったのは、A は10か月齢、B は13か月齢であった(図1)。

2) 母子の情動表出の相互作用の推移

ポジティブ情動はA、B いずれも5か月齢から出現した(図2)。A、B およびその母親のポジティブ情動の出現率の範囲は、A が0.0～4.8%、A の母親が1.3～12.7%であった。同様にB では1.3～13.6%であった。一方、B の母親では18か月齢までは7.3～38.9%、19か月齢以降は2.3～8.4%と18か月齢以前と比較して減少

した。また、A、B いずれも、母子のポジティブ情動の出現率の推移は類似して増減する傾向がみられた。一方、ネガティブ情動の初出は、A は7か月齢、A の母親は子どもが9か月齢の時であり、B は5か月齢、B の母親は子どもが11か月齢の時であった。A、B およびその母親のネガティブ情動の出現率の推移の類似性は認められなかった。

次に母子の情動の同期性の検討のため、母子のどちらか一方のポジティブ情動の表出後に、もう一方がポジティブ情動を表出した頻度の推移を図3に示した。A、B いずれも、子どもと母親のポジティブ情動の行動の同期性の頻度は類似して推移する傾向がみられた。一方、ネガティブ情動はA、B の母親の出現頻度自体が少ないことにより子どもの情動との同期性はほとんどみられなかった。以上のことから、情動の同期性はポジティブ情動のみにおいて示された。

3) 食事時間中に子どもが示す能動的な行動の頻度の推移

能動的行動の初出はA が8か月齢、B が11か月齢であった。その後、能動的行動がもっとも高い出現頻

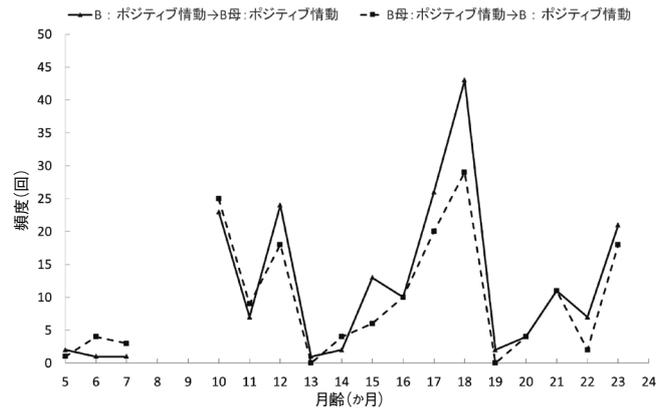
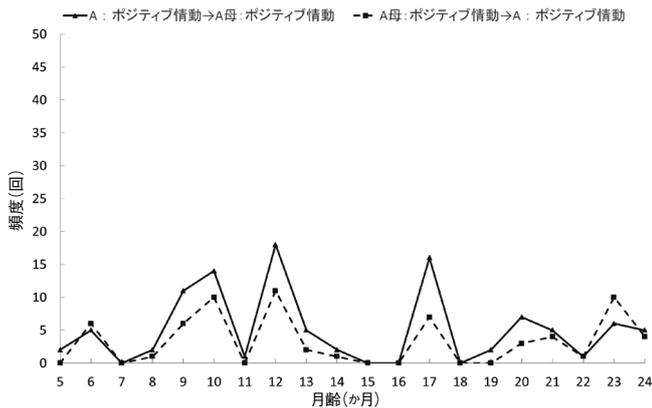


図3 母子のポジティブ情動の生起後にポジティブ情動が生起する回数の推移 (左 A, 右 B)

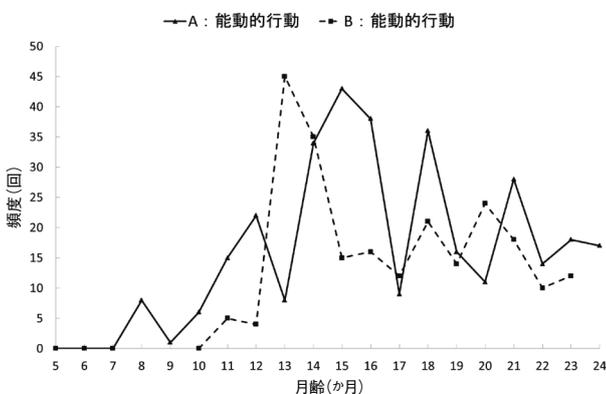


図4 能動的行動の頻度の推移

度を示したのは、A が14~16か月齢、B が13~14か月齢であった (図4)。

2. 母子の葛藤のやりとりにおける質的分析

表3は、A と母親の10, 15, 23か月齢の葛藤場面の記述である。10か月齢において、母親が食器を片付け始めるとA がぐずり始めた。母親はA に食事の終了を確認しつつも手を止めることなく食器の片づけを完了した。この時のA の「ぐずり」は本当の意味で母親を困らせるに至っていないものと考えられる。一方、15か月齢ではA はしきりに「ミニカー」を指さしていた。母親はA に食事の終了を確認しつつ、子ども自らが納得して食事を終了することを待っているかのように食器を片づけようとはしなかった。つまり、A の能動的行動の増加により、母親がA の意志や意図を確認する必要性が生じたと推測される。さらに、23か月齢頃になるとA は食事開始時に摂食を拒否した。母親はA が興味を示しそうな食べ物に言及したり、「ごちそうさまね?」とあえて挑発的に食事の終了を

示唆するなど積極的に働きかけた。一方、A は食事を促す母親に対して恨めしそうな視線を向けており、A の情動表出と母親に注意、促しを受けた時の反応が多様化した。

表4は、B と母親の12, 15, 20か月齢の葛藤場面の記述である。12か月齢において、母親はB がパンを落とした時「どうするの?」と尋ねると、B は母親の問いに素直に応じパンを拾った。一方、15か月齢では、B がおにぎりを落とした時、母親は最初に注意したが、B はその後ももう一度食べ物を落とした。母親は注意することを諦め、食事を終了させたためB は激しく泣いた。泣いているB に、母親は「言い聞かせ」などを行った。B の自己主張的な能動的行動に対して母親は試行錯誤的にさまざまな対応をしたものと考えられる。20か月齢ではB が乳幼児用のコップを落とすと母親は嫌そうな顔をし、母親のそのような表情を見てB は笑った。その後も母親が注意をするとB は笑顔を見せた。B の情動表出と母親への対応が多様化している。一方母親は20か月齢では、15か月齢に比べてB の行動に慣れや諦めを感じてのことか、単純な注意をするにとどまった。

IV. 考 察

1. 情動表出の特徴と推移について

人のコミュニケーションでは他者の情動表出の影響を受けやすい¹⁸⁾が、本研究の量的分析ではポジティブ情動のみに連動性と同期性が認められた。その理由として、食事場面における母親は子どもの食事をスムーズに進めることへの意識が強いことが挙げられる¹⁹⁾。すなわち、食事中的子どもの笑顔やかわいい仕草には母親も情動を共有できるが、子どもがネガティブ情動

表3 Aの10, 15, 23か月齢における葛藤的やりとりを含むエピソード

【A:10か月齢, 19'30"~】

〈ターゲットとなる母子相互作用までの経過: Aは乳児用の椅子に座り, 母親は横から離乳食を与えている。Aの食欲は旺盛で, テンポよく食事を進めていた。〉

母親はAに離乳食を食べさせる。Aは食べる。母親「はい。おーしーまい, からっぽ」と言いお椀の中を見せる。母親は「ないない」と言う。Aは前掛けを取ろうとし, むずがるような声をあげる。母親は前掛けを取る。母親「おいしいごはん, ごちそうさまでした」と言う。母親はAを見て「ごちそう(さま)でいい? 満足した?」と聞く。Aは下を見ながら手をばたばた動かし, 「ん, ん」とイヤそうな声をあげる。母親は「ん?」と声を出しながら立ち上がり, 食器を片付け始める。A「あー」と声を出し, 母親も「あー」と声を出しながら食器を台所の方へと持っていきこうと歩き始める。Aは母親の姿を目で追うと, 不意に正面を向き, 表情を激しくゆがめて「んー」とむずがるような声をあげた。母親は「おうおう」と言いながら食器を台所へと持って行く。

【A:15か月齢, 22'48"~】

〈ターゲットとなる母子相互作用までの経過: この日のAはサンドウィッチを食べたがらないことが多かった。食事開始後8分頃から, 声を出しながら指さしを繰り返した。母親はその度に「どれ?」と尋ね, 子どもが指さす先のものが何かを把握しようとしていた。パンを食べ終わり, Aはヨーグルトを食べていた。〉

母親は「ごちそうさまでしたでいいですか?」と言いながら, 食器を片づける。Aは「ぶーぶー」と言いミニカーを見る。母親は手を合わせ(ごちそうさまのポーズ), 「ごちそうさま?」と聞く。Aは母親の方を向き「ぶーぶー」と言いながら母親の顔を見る。母親は再び手を合わせ「ごちそうさま?」と聞きAを見る。母親が「ぶーぶーは後で」と言う。Aは「ぶーぶー」と言いミニカーに手を伸ばす。母親は「ぶーぶーは後で」と再び言い, Aから遠ざけるようにミニカーを自分の背後に置く。Aはそれを目で追い, 「ぶーぶー」と言いながらミニカーの方に手を伸ばす。母親はAを遮るように身を乗り出し, Aの顔を見ながら手を合わせて「ごちそうさまでいいの?」と聞く。Aは「ぶーぶー」と言いミニカーに手を伸ばす。母親は「じゃあごちそうさまでよ」とAの腕を取る。Aはミニカーの方を見ながら「ぶーぶー」と言う。

【A:23か月齢, 7'30"~】

〈ターゲットとなる母子相互作用までの経過: Aは第2子である弟とともに食事をしていて, Aはあまり食べたくないのか, 母親に促されても食べないことが多々あった。途中, 椅子から立ち上がり叱責を受けるなどしていた。〉

Aはお椀のおじやをすすろうとすることができない。母親が食べさせようとする。Aは不満そうな顔をし, 体を引いて食べない。母親「なに, 食べないの?」と言い食べさせようとする。「A君ニンジン入ってるよ」とAの注意をニンジンに引き付けようとしながら, Aの口元にスプーンを運ぶ。Aは口を開かない。母親「ニンジン。ほら, 見て」と言い食べさせようとする。ニンジンをチラッと見て, 母親を見る。母親が「じゃあいらないのね? ごちそうさまね」と聞くと, Aは首を斜めにし, (不満そうに)唇を突き出して母親を横目で見る。母親「はい。ごちそうさまでしたした」と言う。母親は第2子に食べさせる。母親は「Aくんは?」とAに食べさせようとする。Aは食べない。「Aいらないの, どっち。モーモー(ヨーグルト)食べる人」と言う。Aは首を起こす。母親は食べさせようとする。Aは「んー」と声を出し食べない。母親が「いらない? モーモー」と聞くと, Aは口を開き食べる。母親は少しうんざりした様子で「モーモー食べるんだったらちゃんと食べなさい」と言う。

を生起させると, 情動調整, 食事進行の滞りの修正や叱責など, 単に情動を共有する関係性にないためであると考えられる。

2. 食事場面における母子相互作用の質的な変化

情動発達¹²⁾や認知発達¹³⁾の知見を踏まえたうえで, 本研究で得られた量的分析と質的分析の結果から食事場面の母子相互作用を分類すると, 5~12か月(I期), 13~17か月(II期), 18~24か月(III期)の3期に分類できる。以下にその特徴について論じていく。

I期の特徴は, 食事行為と相互作用における母親の主導性と子どもの受動性である。量的分析では受動的摂食が主であり, 母子相互作用においても意図的・能動的行動はほとんど出現しない。また, 質的分析では母親が主導的に食事を進めていく様子がみとれる。I期の食事場面では母親が子どもの食事進行の主導権を握り, 子どもはそれに従うという関係性がある。

II期の特徴は, 子どもの自己主張の明確化と子ども

の意図への母親の試行錯誤的な対処行動である。量的分析より, 子どもの能動的行動の出現頻度が高いことが示された。質的分析では, 子どもの能動的な行動に対し, 母親が子どもへの関わり方を試行錯誤的に実行していた。1歳頃のこうした子どもの自己主張の明確化は養育者の対応に変化をもたらすとされており⁷⁾, 本研究での結果はこのような知見を支持している。

III期の特徴は, 子どもの情動表出および親の行動に対する反応の多様化と母親の適応的対応である。III期の葛藤場面の質的分析にみられたように, A, Bの情動表出が多様化した。自己意識的情動は18か月頃から出現し始めるものであり¹²⁾, 本研究でも同じ頃に自己意識的情動が表出されている。また, III期ではAとBの母親は子どもの行動への対応が異なっており, Aの母親はII期に比べ積極的な方略を用いていた一方で, Bの母親はII期に比べ消極的な対応をしていた。両者の違いとしてAでは, 母親の働きかけへのAの反応が乏しいので母親はより積極的な態度をとったの

表4 Bの12, 15, 20か月齢の葛藤的やりとりを含むエピソード

【B: 12か月齢, 21' 00" ~】

〈ターゲットとなる母子相互作用までの経過: Bは乳幼児用のイスに座り食事をしていた。食事を開始して5分を過ぎた頃から乳幼児用椅子を嫌がり、床に座った。食事を開始して食事開始後10分頃からBは歩き回ることが増え、母親はBが歩き回る度に「座って」と声をかけていた。Bはパンを食べると笑顔を浮かべ、母親もBの様子に笑顔を浮かべていた。〉

Bが手に持っていたパンを放すと、パンは床に転がった。母親は「あっ」とやや低い声を出し、「Bちゃん転がったよ」と声をかける。母親はBを見ながら「どうするの?」と聞く。Bは「あー」と声を出し、両腕を上下させたあと、床に落ちたパンを拾おうとする。母親は「そうそう。食べて」と言う。Bはゆっくりとした動きでパンを拾い上げ笑顔を浮かべる。母親は「ああ、持ってきた」と言いながら笑顔を浮かべBを見る。

【B: 15か月齢, 15' 00" ~】

〈ターゲットとなる母子相互作用までの経過: この月、B家は新居に引っ越した。食事はダイニングテーブルに用意され、Bは足の長い乳幼児用のイスに座って食事を開始した。食事を開始して10分を過ぎた頃から、甲高い声をあげながら、一定のリズムで自分の胸を何度も叩いた。〉

Bはおもむろに右手に持っていたおにぎりを床に落とした。母親は「あ! こーら」と怒気をはらんだ声を出し、怒ったような表情でBを見る。Bは普段と変わらぬ様子でカメラの方を見る。母親は「いけないでしょ」と少し怒気をはらんだ声を出す。母親は「どうするの?」とBに問いかけながら、床に落ちたおにぎりをBに渡す。Bは母親を見ながらおにぎりを手に取り食べる。母親は「ダメでしょポイしちゃ」と言う。するとBは再びおにぎりを床に落とす。母親「Bちゃん」とBを見る。Bは普段と変わらぬ表情で観察者の方を見る。母親は「もうおしまいだよ」と言い、落ちたおにぎりをラップの上に置く。母親は「はいおしまーい」と言う。その後、母親は食器を取り上げて食事を終了させ、Bは大声をあげて泣きだすこととなる。

【B: 20か月齢, 12' 40" ~】

〈ターゲットとなる母子相互作用までの経過: Bは母親の隣でイスに座り、食事をしている。食事開始からしばらくして第2子がぐずり始めた。母親はときどき第2子の様子を見ながら自分も食事を続け、Bとの間には笑顔が見られた。〉

Bは突然、手に持っていたマグマグを床に放った。母親は食べ物に口を含みながら、「んーん」と嫌そうな声を出し、やや怒ったような表情でBを見る。Bは楽しそうな表情で観察者を見ると(観察者に楽しそうな様子を見せるように)、「んー」と声を出し、楽しそうに母親を見る。母親は「えへへじゃないの」とBを見る。Bは笑顔で母親を見ていたが、観察者の方を向く。母親は「Bちゃん。ダメだよ」と言う。Bは平気な顔をしている。母親は「ねえ」と言いつつ、落ちたマグマグを拾う。その間に、Bは笑みをつくり、「んふふ」と笑う。母親はマグマグをテーブルに戻す。Bは母親を見ながら笑みを浮かべている。

に対して、Bでは、母親への反抗的な態度に対し母親が消極的な態度をとるようになったと推察される。これらのことから、A、Bいずれも子どもに対する母親の反応の変化は、Ⅱ期において自己主張が明確になった子どもに対して、試行錯誤的な関わりを経て、Ⅲ期においてその子の行動に適応させた結果であると推察される。

以上の3期の母子相互作用の変化としては、主導権を握る母親と受動的な子どもという関係(Ⅰ期)から子どもの自己主張が明確になることにより、子どもと母親の個性が互いにつぶかり合う(Ⅱ期)。そのようなさまざまな相互作用の経験を積み重ね、母親自身も消耗せずその子に合った対応を見い出そうとする(Ⅲ期)ことが示唆される。

V. 本研究の限界と本研究の知見の小児保健分野での活用について

本研究の限界として次の3点が挙げられる。

第1に、観察者の存在が母子の行動に影響を与えている可能性である。観察者が存在することで、子ども

が観察者に興味を示したり、母親がネガティブ情動表出を抑制する可能性などが考えられる。フィールド研究において観察者の存在は「ありのまま」を壊す¹¹⁾ことになるため、この点について吟味して分析する必要がある。

第2に、「うなずき」、「首振り」、「指さし」、「手伸ばし」の4つの行動を「能動的行動」としてまとめた点である。本研究の分析期間における子どもの月齢は5~24か月齢であり、共同注意¹³⁾の視点から見ると二項関係の時期から発現する行動と指さしのように三項関係の発現以降にみられる行動の両方を含んでいる。本研究は、能動的行動という視点からこれら4つの行動の一つにまとめたが、今後は共同注意の視点を取り入れて行動カテゴリーをより吟味していきたい。

第3に、本研究では各児の物理的、社会的環境の変化を反映した詳細な考察ができなかった点である。例えば、A、Bはいずれも転居前は座卓であったが、転居後はダイニングテーブルとなった。このような変化でBの転居前にみられた食事の立ち歩きは不可能になった。また、A、Bはいずれも16か月齢頃に第2

子が誕生した。本考察で論じたⅢ期はA, Bいずれも第2子誕生後の時期と一致する。本研究の発達の区分は子どもの一般的な発達との関係性で論じたが, 第2子誕生による対象児の心理的变化, 母親の対象児への配慮や対応の変化が母子の行動に影響した可能性は否定できない。本研究では, 環境の変化が極めて類似した2児のみを分析対象とすることによって環境の変化による影響を小さくするよう努めたが, 今後, 個々の環境の違いや変化の時期を考慮していく必要がある。

最後に本研究から得られた知見の小児保健分野での活用について考察する。

本研究での調査対象児は2児において共通性と個別性が認められた。量的分析での母子の共通性は, ポジティブ情動における出現率の類似的な推移と同期性である。一方, 同じポジティブ情動のみをとっても出現率や頻度などの範囲については個別性がみられた。また, 質的分析では, 母親にとって問題となった行動はAとBでは異なったものの, 同じ行動が繰り返し出現するという点においては共通しており, 専門家は, 一見異なった事象に対する抽象化によって, 共通性を見出す訓練が必要であろう。具体的には, 母親は子どもの食についてさまざまな悩みをもっている²⁰⁾が, そのような母親の悩みは, しばしば偏食や落ち着いて食べないなどとして表現される。しかし, 本研究の結果を見てみると, 必ずしも食そのものの問題ではなく, 子どもの自己主張の明確化や母子相互作用の膠着化などの表現型の一つであることも否定できない。小児保健分野での専門家は, 母親による子どもの食の悩みをより具体的に尋ね, その子に特有の行動としてどのようなものがあるか, その個別性を把握するとともに, その時期の子どもの一般的発達の特徴を重ね合わせたうえで子どもの行動のもつ意味を母親に伝えることによって, 母親の悩みを軽減させ, 子どもに対する母親の対応に柔軟性をもたせることができるものと考えられる。

付 記

本研究の一部は, 2016年4月(日本発達心理学会第27回大会, 於:札幌)で発表したものを含む。

謝 辞

本研究にご協力いただいたAくん, Bちゃんとお母様, 貴重なご意見をいただきました大正大学心理社会学部 井

出裕久教授, 荒生弘史准教授に深く感謝いたします。

本論文は平成27年度大正大学大学院人間学研究科修士論文の一部を改変したものである。本研究の一部は, 科学研究費基盤研究(B)(課題番号20330140)より部分的援助を受けた。

利益相反に関する開示事項はありません。

文 献

- 1) 外山紀子, 無藤 隆. 食事場面における幼児と母の相互交渉. 教育心理学研究 1990; 38: 395-404.
- 2) Negayama K. Weaning in Japan: A longitudinal study of mother and child behaviours during milk- and solid-feeding. Early Development and Parenting 1993; 2: 29-37.
- 3) 河原紀子. 食事場面における1~2歳児の拒否行動と保育者の対応: 相互交渉パターンからの分析から. 保育学研究 2004; 42: 112-120.
- 4) 川田 学, 塚田-城みちる, 川田暁子. 乳幼児における自己主張性の発達と母の対処行動の変容: 食事場面における生後5ヵ月から15ヵ月までの縦断研究. 発達心理学研究 2005; 16: 46-58.
- 5) 外山紀子. 食事場面における1~3歳児と母の相互交渉: 文化的な活動としての食事の成立. 発達心理学研究 2008; 19: 232-242.
- 6) 河原紀子. 保育園における乳幼児の食行動の発達と自律. 乳幼児医学・心理学研究 2009; 18: 117-127.
- 7) 河原紀子, 根ヶ山光一. 食事場面における1, 2歳児と養育者の対立的相互作用: 家庭と保育園の比較から. 小児保健研究 2014; 73: 584-590.
- 8) 坂上裕子. 歩行開始期における母子の葛藤のやりの発達の变化—母子における共変化過程の变化. 発達心理学研究 2002; 13: 261-273.
- 9) 小田切紀子. 生涯発達の研究課題と研究法. 岩立志津夫, 西野泰広編. 発達心理学ハンドブック2 研究法と尺度. 東京: 新曜社, 2011: 149-173.
- 10) 須田 治. 情緒がつむぐ発達: 情緒調整とからだ, ころ, 世界. 東京: 新曜社, 1999.
- 11) やまだようこ. モデル構成をめざす現場心理学の方法論. やまだようこ編. 現場心理学の方法論. 東京: 新曜社, 1997: 161-186.
- 12) Lewis M. The emergence of human emotions. Lewis M, Haviland-Jones JM, Barrett LM, Eds. Handbook of emotions, Third edition. New York:

- Guilford Press, 2008 : 304-319.
- 13) Tomasello M. Joint attention as social cognition. Moor IC, Dunham PJ, eds. Joint attention : Its origin and role in development. Lawrence Erlbaum Associates, 1995 : 103-130. 大神英裕監訳. ジョイント・アテンション—心の起源とその発達を探る—. 京都 : ナカニシヤ出版.
 - 14) 川田 学. 乳児期における自己発達の原基的規制—客体的自己の起源と三項関係の蝶番効果. 京都 : ナカニシヤ出版, 2014.
 - 15) 野澤祥子. 歩行開始期の仲間同士における主張的やりとりの発達過程—保育所1歳児クラスにおける縦断的観察による検討. 発達心理学研究 2013 ; 24 : 139-149.
 - 16) 長谷川正幸, 長谷川智子. 親密性がノンバーバルコミュニケーションのシンクロニーに及ぼす影響 (1) 16行動変数間のシンクロニーについてのマイクロ分析の試み. 第23回発達心理学会大会論文集, 2012.
 - 17) Fleiss JL, Cohen J, Everitt BS. Large sample standard errors of kappa and weighted kappa. Psychological Bulletin 1969 ; 72 : 323-327.
 - 18) Hatfield E, Cacioppo JT, Rapson RL. Emotion contagion. Cambridge University Press : Cambridge, 1994.
 - 19) 外山紀子. 発達としての共食—社会的な食の始まり. 東京 : 新曜社, 2008.
 - 20) 厚生労働省 雇用均等・児童家政局. 平成17年度乳幼児栄養調査結果. 2006.

[Summary]

This study examined the developmental processes of

mother-infant interactions during mealtime. Longitudinal observations were conducted for 2 mother-infant dyads (one boy and one girl) from the start of weaning, at 5 months old, to 24 months old. Mother and infant emotional expressions and infant behaviors of self-assertion were quantitatively analyzed using behavior coding whereas mother-infant conflicts were analyzed qualitatively. Behavior coding showed 1) the percentages of time of mother's and infant's positive emotional expressions during mealtime were linked, and 2) positive emotional synchrony between mothers and infants. On the other hand, no links nor synchrony of negative emotional expressions between the mothers and infants were shown. The results from quantitative and qualitative analysis suggest that this period of childhood can be divided into 3 phases : I (5~12 months old) mother's initiative and infant's passivity ; II (13~17 months old) clear infant self-assertiveness and mother's coping behaviors through trial and error ; III (18~24 months old) the diversification of infant emotional expressions and reaction to mother's behavior and mother's adaptive reactions. These findings suggest that if mothers feel annoyed with their infant's eating problems, child health care specialists should explain the specific meaning of an infant's problematic behaviors during mealtime through the perspective of the developmental characteristics of that infant's age.

[Key words]

longitudinal study, mother-infant interactions, conflicts, emotional expressions, mealtime